

ホモ・ベリクス (Homo bellicus) -人間は戦争が好きなのか

関西学院大学 荻野昌弘

溢れる「戦争」情報／乏しい「戦争」研究

最近、マスコミ報道で、「戦争」やこれに類するということばを聞かない日はない。世界のどこかで戦闘は日々繰り広げられており、実際に戦闘がない場合には、そのリスクが増大していることが論じられる。それは、まるで人間は生来的に戦争を好んでいるかのようであり、ホモ・エコノミクスやホモ・ルーデンスではなく、人間をホモ・ベリクス (Homo bellicus) と捉え、研究するほうがいいのではないかとさえ思われてくる。

しかし、戦争という視点から社会を捉えようとする社会学的研究は、近年に至るまでけっして多くはない。社会学において、戦争は例外的なできごととして捉えられる傾向にあり、少なくとも社会秩序の形成において、戦争が果たす役割を中核に据えた理論はほとんどない。たとえば、近年、社会学においてしばしば援用されるリスク概念において、戦争のリスク、戦争とリスクからリスクを捉えようとする視点は見当たらない。

社会学の公準

なぜ、社会学において、ながいあいだ、戦争は片隅に追いやられていたのか。それは、社会学が前提とする「社会」概念にある。

エミール・デュルケームの『社会分業論』では、社会分業は、あるひとつの社会の内部においてのみ可能になるとされている。デュルケームの議論をまとめてみると次のようになる。

公準Ⅰ 共通の信仰（集合意識）を持つ社会が存在する（個人の結合が社会を生むのではない）

公準Ⅱ 社会は自律的に発展する ((Durkheim, E. 1978, *Division du travail social*, P.U.F)

集合的沸騰のように、暴力に関わる概念が皆無というわけではないが、デュルケームにおいて、社会は自明の大前提であり、しかも、それは自律的に発展していくと考えられている。このため、社会を社会の「外部」との関係において捉えるという発想が欠けている。デュルケームの社会観は、「共和国」の成立から遡及的に社会の発展を捉えようとしており、社会のイメージとして国家が念頭に置かれているが、国家（あるいは社会）が、他の国家との関係においてのみ存在するという関係論的発想はない。社会の外部という発想がない以上、外部に存在する社会との「戦争」という問題には関心が至らない。

国家と戦争

実際には、近代国家は、その出発点から、戦争を志向していた。フランス革命後に、フランスが他のヨーロッパ地域に戦争を仕掛け、日本が明治維新後、二十数年で清と戦争を始めたのは偶然ではない。なぜなら、他者への暴力行使の可能性は、国家の存立構造のなかに内在して

いるからである。

国家はまず国境を人工的に定める。そして、国境の外部は忌避すべき領域ではなくなり、境界外存在を「外国人」として認識する。外国人は、国家に帰属してはいないが、「国民」と同じ「人間」として、交流可能な存在である。そうであるがゆえに、境界外存在は支配の対象ともなりうる。そして、実際に領土を拡大する方向に進む。西欧型の近代国家は、支配形態としての国家制度を欠いた、その意味で領土拡張の芽がない地域を併合すると同時に、隙あらば、すでに他の国家に帰属している地域の併合もめざす。これが、紛争が勃発する契機となる。今日のウクライナ問題や中東問題に至るまで、こうした状況は続いている。

戦争が生み出す社会

近代国家の存立に関わる国境は、戦争を契機として変化する。それは同時に社会変動を引き起こす。境界が変化することで、そのはざまに生きるひとびとは、翻弄される。社会学が、デュルケームの社会に関する公準 I、II に準拠しているだけでは、こうした点を捉えることはできない。確定した境界内の集合である「社会」ではなく、戦争などによって引き起こされる境界や空間の変容、境界の変容によるひとびとの移動などが、社会を作っているからである。この意味で、戦争が社会を生みだしており、こうした視点から社会を捉え直す必要がある（荻野昌弘、島村恭則、難波功士編『叢書 戦争が生み出す社会』全三巻、新曜社、2013-2014 年）。

今日、欧州・中東を中心に生じているテロリズム、紛争、内戦などと呼ばれる戦争も、英仏を中心とした国家が、19 世紀から長期にわたって展開した領土拡大戦略の延長線上に起こっている。フランスの週刊誌「シャルリー・エブド」編集部を襲撃したクアシ兄弟は、アルジェリア系フランス人であるが(両親はアルジェリア人で、兄弟の幼少期に死去し、その後兄弟は施設に入る)、兄弟を「移民二世」「フランスにおけるマイノリティ」などのように、国家内部のカテゴリーとして捉えるだけでは不十分で、覇権国家による境界の設定とその変容のはざまにある両義的存在として見る必要がある。両義的存在は、19 世紀以来の植民地化政策、第一次世界大戦時の労働力不足によるマグレブからの人口の流入、アルジェリア独立戦争等の結果として生みだされている。

「テロリスト」となったクアシ兄弟のようなジハーディストたちは、「グローバル」な活動を行う。一方で、イスラム国と戦うため、クルド系フランス人も、クルディスタン自治政府軍事組織ペシュメルガに入り、イラクに旅立つ。「グローバリゼーション」を問題にするなら、このグローバルな闘争状態をも問題にする必要があるのではないか。人間が、生来ホモ・ベリクスであるかどうかにかんして答えを出すことは難しいが、社会像の転換を遂げた社会学は、ホモ・ベリクスのように見えてしまう状況を生み出す構造を明らかにしていくうえで大きな貢献ができるはずである。